

福澤諭吉は

誤読されている

渡辺利夫

拓殖大学学事顧問

その論説を虚心に読めば福澤こそ現代に通じる真のナショナリストだ

渡辺 「福澤諭吉全集」は、私の学生時代にはまだ完結していませんでした。しかし、福澤の書いた主要な文献は慶應の図書館に整っていましたので、後にまとめられることになる作品は、ほぼ読んでいました。

大きな政治的、経済的なできごとが起こると、福澤ならどんな発言をするのだろうか、考えるクセのよくなものが私には身についています。

私は福澤研究者ではないし、もとより日本思想史の研究者でもないけれども、福澤の論説に親しみこれら自分のものにしてきたという意味では、かなりの福澤読みだという自負があります。

昨年十二月に拓大総長の任期が満了になり、多少のゆとりができたので、ひたすら福澤を読み直してみました。そこで得た直観とい

ますか、ここが福澤の論説のポイントだと思えるところを切り抜いて、私なりの「福澤語録」をつくり、一気呵成いっきという言葉の過ぎですが、六カ月ほどで書き上げたのが、この「士魂 福澤諭吉の真実」です。

今までの日本人の福澤理解といいますが、福澤のイメージというのは、あまりにせせこましく、自分たちが考えているところに福澤を閉じ込めてきた。逆に、自分たちがこうあつてほしいと思う福澤像を拡大照射して、それを勝手に福澤思想と名づけ

てきたのではないか。

福澤諭吉は、「西洋事情」を出版してから最後の「修身要領」に至るまで、休むことなく書き続けた言論人です。カレントなテーマを論じ続けてきましたから、時間の経過とともに考え方が変わっていることもある。論理矛盾しているところもあります。幕末の三十三年、維新後の三十三年間、「恰あたかも一身にして二生を經るが如く、

一人にして両身あるが如く」生きて、六十六で死んでいきます。そんな男の思想が首尾一貫しているというのは、よほどの原理主義者でもないかぎりあり得ません。現実の社会の虚実を見つめて苦悶する筆致そのものが福澤思想だ、という見方を私はとります。あれほどの多元的な思想的巨人ですから、そういう見方じゃないと、真実は探り当てられません。

あまりに強いナショナリズムへの警戒感に、私は正直もううんざりです。うんざりしているだけでなくて、このままでは二十一世紀の日本はもたないんじゃないかという感さえあります。福澤がもし生きていたとしたら、日本の現状を見て、どう発言しただろうか。私はそういう空想をすることがよくあります。



渡辺氏の力作「士魂 福澤諭吉の真実」(海電社)

戦後の左翼リベラリズム、これに、こんにち、ますます強いものになっていますが、このイズムの底にあるのは、ナショナルなもの否定です。ナショナリズムへの嫌悪感といつてもいい。一体、何を言っているのでしょうか。戦争が終わって七十年以上も経っています。東西冷戦も終わったではないですか。それどころか、中国の膨張によって「新冷戦」時代が始まってもいます。

人間は他の生命体と同じく、いや、まったく同じように、その根本において私(わたくし)です。私(し)です。個の——個人の個です——個の私情こそが、至上の価値を持つ、そういう存在が人間じゃないか、と福澤は考えていたのではないかと思います。外国に対する場合には、必ずや同胞としての私情が湧き出してくる。つまり、国民としての私情、ナショナリズムという感情が湧き出てこないはずがない。これを、福澤は偏頗へんぱ

心と言ったり報国心と言っています。

外国が私情と偏頗心を露にしている以上、自分たちもこの心を重んじなければ日本はもたない。そういう思考が福澤の心の底にはありました。

現代の日本を見てみると、福澤のこの主張からますます遠いところに来てしまっている。ナショナルなものをつかいて福澤に対して、現代人はナショナルなものを胡散臭く、嫌悪すべきものと考えているようです。

福澤と言えば文明開化論者である、と人はいいます。その主要著作が『文明論之概略』だともいいます。これは私も否定しません。知識人に日本近代の名著を三つ挙げよといえば、『文明論之概略』が大抵入ります。幕末から明治の初期において、日本を文明化の道を進まないと説いた本だというわけです。しかし、そう主張する

人は、『文明論之概略』の第十章をぜひ読んでいただきたい。

「内外の区別を明にして我本国の独立を保つことなり。而してこの独立を保つのは文明の外に求むべからず。今の日本人を文明に進むるはこの国の独立を保たんがためのみ。故に、国の独立は目的なり、国民の文明はこの目的に達するの術なり」

文明と独立とどちらが大切かと問えば、もちろん独立のほうが重要である。文明は独立を達成するための手段だと福澤は断言するのです。この結論に達するために、第一章から第九章までを書き進め、そして第十章に到達しているのです。第十章を読み込めば読み込むほど福澤の痛いほどの心情が伝わってきます。まさにこの結論を導くために、大著を書いたのです。この部分を、福澤の惑いであるかのように左翼リベラリス

トは捉えています。それはやつぱり福澤の読み込み方の間違いです。

——『学問のすゝめ』の「天は人の上に……」の影響が大きいですね。

渡辺 『学問のすゝめ』は、福澤をして福澤たらしめ、福澤の名を高からしめた最初の衝撃的な著作です。彼を天賦人權説の男だと言ったり、文明開化論者と言ったり、啓蒙主義者と言ったり、欧化主義者と言ったり、そういう表現のすべては『学問のすゝめ』から出ています。

『学問のすゝめ』は、実はそんな簡単な文章ではないと私は見えています。『学問のすゝめ』という著作は一気に書き上げられたものではなく、時に応じて書き進めた長期にわたる論説のいわばコレクションです。必ずしも首尾一貫してはいない。最初の三、四編は、文字通り天賦人權説と社会契約説に立脚しています。ここだけ

を取り上げてつくられたのが一般的な福澤イメージです。福澤論吉が一万円札の肖像になっている理由も、まさにそのイメージの故でしょうね。

しかし、『学問のすゝめ』の第七編をよく読んでほしい。この第七編というのが、福澤思想の核心にあるところのうちの『丁丑公論』や『瘠我慢之説』につながっているということ、福澤研究者は指摘しません。想像すらしていないようです。

マルチルドムとは

——第七編に出てくるマルチルドムというのは、どういう意味ですか。渡辺 殉死と訳したらいいでしょうね。この言葉の意味を考えて以来、私自身、『学問のすゝめ』の読み方は随分と変わりました。第七編で福澤は、政府の暴力(暴政)に人民はいか

に抗するかと問うて三策を提示しています。一が「節を屈して政府に敵対する」、二が「力を以て政府に敵対する」、「三が「正理を守り身を棄る」です。

このうちどれを取るべきか。福澤はベストは第三策だと言っています。「正理を守り身を棄る」とは、「天の道理を信じて疑わず、如何なる暴政の下に居て、いかなる苛酷の法に窘めらるゝも、その苦痛を忍びて我志を挫くことなく、一寸の兵器を携えず、片手の力を用いず、唯正理を唱て政府に迫ることなり」と説き、「世を患て身を苦しめ、或は命を落すものを西洋の語にて『マルチルドム』と云ふ」といいます。マルチルドムとは martyrdom という英語ですが、殉死のことです。

天賦人權説や社会契約説により、日本社会に新規範を示そうとした福澤が、このような旧時代そのままの

精神の構えを最上策として提示するというのは、確かに意外なことです。

けれども、福澤ののちの思想を見ていると、これはすこしも不思議なことではないのです。第七編が書かれたのは、明治七年の三月末日です。この時期がどんな世相だったかという、維新によって特権を奪われた不平士族による反乱が続発した頃です。その先駆けになったのが、前司法卿(司法大臣)江藤新平による佐賀の乱です。この乱は大久保利通率いる新政府軍によって鎮圧され、江藤は梟首の刑となったのです。

この事件を背景に、福澤がマルチルドムを書いたのではないかと私は想像しています。西郷隆盛は征韓論に敗れて下野していました。江藤は、当然、西郷に加勢を求めるわけですが、西郷ははつきりとこれを拒否します。そのうえで西郷は、「殉

死の道を選べ」というたぐいのことを言ったのではないか。

実は、福澤は西郷とは面識がありません。けれども、おそらく次のような経緯で福澤は西郷のことを知ったのだと思います。福澤の慶應義塾の門下生に、中津藩の増田宗太郎という人物がいました。「福翁自伝」によると、増田は福澤を一度は暗殺しようと思んだのですが、その後、福澤という人物に惚れ慶應義塾に入った人物です。

増田は、西南戦争勃発の報に接するや、「中津藩には戻るな」という福澤らの引き留めにもかかわらず、義塾を辞めて中津に帰り、中津隊を率いて西南戦争に参加、城山で西郷とともに自刃します。この増田を通じて、福澤は西郷という人物の器量を知らされたのではないのでしょうか。正理を諄々と説いて正理に殉ずる人

物だと、福澤は西郷を見抜いていたのだと思います。

西郷隆盛と佐倉惣五郎

『学問のすゝめ』の第七編を読んでみると、「マルチルドムを実践した歴史上の人物は、佐倉惣五郎ただ一人」と書いてあります。佐倉惣五郎という人物が存在したことは確かですが、歌舞伎や浄瑠璃などによって随分と脚色されて、庶民の人気を博した人物です。おそらく福澤は西郷という人物を惣五郎に仮託して言いたかったのではないかと、想像しています。

西南戦争とは文字通りの戦争であって、マルチルドムじゃないんじゃないかという反論もあろうかと思えます。しかし、西南戦争は、西郷の意に反した私学校生徒の暴発だと私は見えています。西郷は私学校の生徒

務省を同じように見ていました。この点をさらにあからさまというか、露悪的に表現したものが『通俗国権論』です。明治十一年の論説です。彼は、世界は禽獣、つまりけだもの世界だといえます。日本が独立を維持するには、軍事力の強化が不可欠だという主張を初めて前面に押し出したものが『通俗国権論』です。世界は国家を基本単位としそれが政府をいただいて競い合っている。列強諸国は、国力の伸長を求めてアジア諸国の開国、属領化、植民地化に邁進している。そうした状況下にあつてひとり日本のみが高尚なる文明を求めようと努めても、その努力は無に帰してしまふ危険性が大きいにある。この禽獣世界で日本が生き延びていくのには、士風、士魂を擁した指導者のもと国家としての凝集力を発揮しなければならぬ。

『丁丑公論』がナショナリズムを支える精神の構えを論じたものとすれば、『通俗国権論』は、ナショナリズムに裏付けられた強兵の必要性を主張したものだといえることができます。周辺に膨張主義の中国を抱えているのに、この期に及んでなお極めて限定的な集団的自衛権の行使しか容認できないというのが現代日本の恥ずべき体たらくです。

「今の禽獣世界に処して最後に訴うべき道は必死の獣力にあるのみ」これが『通俗国権論』の問題提起であり、かつ結論です。憲法九条があるから日本は平和を保つていられると左翼リベラルは言いたいようですが、福澤は愚論だと否定しています。「百卷の万国公法は数門の大砲に若かず、幾冊の和親条約は一筐の(ひと箱の)弾薬に若かず。大砲弾薬は以て有る道理を主張するの備に非ずして

の後をついて死に場所を求め九州山地をさまよひ、最後に城山で自刃したというのが本当じゃないでしょうか。福澤の言うマルチルドムの体現者は西郷隆盛に他ならないというのが、私の見立てです。この西郷思想をはつきりと建言したものが『丁丑公論』であり、『瘠我慢之説』です。そうした見方を再確認できたことが、今回の福澤読み返しの収穫です。

——士魂やマルチルドムを現代に例えれば、様々なことが思い起こされます。たとえば外務省批判がそうです。武力の背景のない丸腰の外務省に果たして何ができるのかなという気がします。

渡辺 まったくです。拉致問題一つとってみてもね。結局ナショナリズムを背負うという気概なく外交をやっていくと、今の外務省みたいになつてしまいます。福澤も当時の外無き道理を造るの器械なり。つまり万国公法・和親条約も兵力を前にすれば何の役にも立たないと前段で言い、後段では、兵力とはもともとは存在しない道理を敢えてつくり出すものだとさえています。

外交に関しても、弓を「引て放たず満を持するの勢いを張る」国民の気力と兵力の後ろ盾を持たない外務省が交渉を通じて外交を決することなどでははしなれないといえます。現代のリベラリストの幼稚さをあざ笑っているようなこの論説が、もう百四十年前に書かれているのです。

これは現代の立憲主義者批判にも通じます。まったく、あの立憲主義者たちの猛々しさを、福澤が生きていたら、なんと見るだろうか。安保法制に反対する憲法学者の生硬な議論を聞いていると、「憲法榮えて国滅ぶ」ごしか思えません。ここに民権と

国権という概念が出てきます。
——その次に書いた『時事小言』にある言葉ですね。

渡辺 『時事小言』におけるキーワードが、民権と国権です。自分は、民権論を大いに歓迎する。しかし、民権を伸長し国会を開設しても、どのような国柄の国家を建設すべきか、という肝心の問題を議論するのでなければ、民権など論じたところで詮無きことだとはつきり言っています。
「俚話に、青螺が殻中に収縮して愉快安堵なりと思ひ、その安心の最中に忽ち殻外の喧嘩異常なるを聞き、窃に頭を伸ばして四方を窺えば、豈計らんや身は既にその殻と共に魚市の俎上に在りということあり」

国家という殻が外敵によって壊されてしまえば、国民の生命や財産を守るなどできないと言っているのですが、福澤という文章家は比喩

が実にたくみですね。

福澤は、『学問のすゝめ』を書いて啓蒙思想家として国民の前に立った人物です。民権と国権に分ければ、本来は民権の立場に立っているはず

です。しかし、禽獣の世界にあって国家的危機に対するには、権道(国権)しかない。「我輩は権道に従う者なり」と福澤は宣言しています。自由民権運動は明治十年代に起りますが、福澤のどこを読んでもそれをサポートする言説などありません。教科書などを見ると、自由民権運動イコール福澤論吉となつていますが、これは間違いです。福澤は徹底したリアリストです。マキャベリズムに通じる考え方の持ち主でもありません。戦後日本の知識人、特にジャーナリズム等に関わる人たちは、リアリズムに目覚めてほしい。目覚める一つの方法は、同じような状況に置かれ

ていた明治の福澤の論説に目を通すことが、何よりの妙薬と信じます。

なぜ『脱亜論』を書いたか

——いままでのお話が「士魂 福澤論吉の真実」というご本の肝に当たるところですね。

渡辺 ここで論を閉じてもいいのですが、福澤といえば朝鮮蔑視論者あるいは脱亜論者という左翼陣営からの批判はやむことを知りません。最後に、この点について私見を少し述べてみます。

福澤が朝鮮蔑視論者だというのは、福澤の本心を知らずにのちの『脱亜論』をかじつての稚拙な決めつけに過ぎません。明治のあの時代にあつて、福澤ほど朝鮮近代化の必要性を論じた人は他にいません。朝鮮が近代化して清国から独立しなければ、強大

な清国の圧力を受けて、日本も危ういと考えた知識人が、福澤です。朝鮮を蔑視するどころか開化派の金玉均や朴泳孝に対する福澤の思い入れは、「恋」というほどに強いものでした。

朝鮮の開化派と事大派との血で血を洗う争い、そして朝鮮と清との関係については、『士魂』の中でコンパクトに論じましたので、ぜひそちらを読んでいただきたいのですが、福澤が『脱亜論』を書いた最大の契機は、甲申事変(明治十七年の開化派によるクーデター)の首謀者に対する残酷を極めた刑罰にありました。

「人間娑婆世界の地獄は朝鮮の京城に出現したり。我輩は此国を目して野蠻と評せんよりも、寧ろ妖魔悪鬼の地獄国と云わんと欲する者なり」と最大級の表現で朝鮮を難じています。この処刑に直接手を下したのはたしかに朝鮮の事大派官僚だけけれども、

それを指揮したのは紛れもなく支那人だと福澤は断じています。朝鮮開化派の処刑について福澤は、『時事新報』の明治十八年二月二十三日付けと二十六日付けの二回にわたつて書きます。二十日後の三月十六日付けの『時事新報』には、激情を抑えきれず『脱亜論』を認めました。期待が一挙に絶望に反転したのですから、人間なら当然そういう感情に襲われるのも致し方ない。福澤ほどの人物であっても致し方ないことです。『脱亜論』というたったひとつの文章を見て、福澤は根っからの朝鮮蔑視論者だと評するのはいかにも軽率です。

『脱亜論』は、四百字詰め原稿用紙で五枚半ほどの長さのものです。その第二パラグラフで、「亜細亜全洲の中に在る所に唯脱亜の二字に在るのみ」と言い、第五パラグラフの最後で、「悪友

を親しむ者は共に悪名を免かるべからず。我れは心に於て亜細亜東方の悪友を謝絶するものなり」と言います。しかし、福澤はこの後も朝鮮論を書き続けます。実際の福澤は『脱亜論』の執筆後も朝鮮と謝絶などしてはいません。もちろん、帝国主義時代のパワーポリティクスの波が極東の地まで及んできたことはまぎれもない事実ですから、以降の福澤の朝鮮論には、パワーポリティクスの論理がだんだんと強く入り込んでいき、福澤一流の論理が構成されていくのです。

歴

わたなべ としお

1969年、甲府市生まれ。慶應義塾大学卒業。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て、拓殖大学学長、外務省国際協力有識者会議議長(前)、第17期学術会議委員、アジア政経学会理事長(元)、山梨総研理事長。2001年、正論大賞を受賞。著書として「成長のアジア 停滞のアジア(吉野作造賞)」「開発経済学—経済学(現代アジア(大平正芳記念賞))」「西太平洋の時代(アジア太平洋賞大賞)」「神経症の時代 わが内なる森田正馬(開高健賞)」「放哉と山頭火 死を生きる」などがあ